

Title	<書評>秦野悦子・やまだようこ編 『シリーズ/発達と障害を探る コミュニケーションという謎』
Author(s)	松田, 千都
Citation	教育方法の探究 (1999), 2: 89-91
Issue Date	1999-03-15
URL	https://doi.org/10.14989/190221
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

【書評】

秦野悦子・やまだようこ編

『シリーズ／発達と障害を探る① コミュニケーションという謎』

(ミネルヴァ書房、1998年6月発行、203ページ、2200円)

松田千都

「発達と障害を探る」シリーズ三部作——『コミュニケーションという謎』、『遊びという謎』、『能力という謎』——は、日本発達心理学会における自発的な分科会活動の1つ、発達障害分科会によって企画されたものである。発達障害分科会では、「障害から発達を考える、また発達から障害を考える」ということが、分科会発足当初からの基本姿勢とされているという。ノーマライゼーション、インクルージョンといった、障害をもつ人々をめぐる社会的な流れにも影響を受けながら、分科会のメンバーが、日々の研究や実践活動をとおして、自らの発達のパラダイムを問われるような事態に直面してきていることが、この基本姿勢について議論を深める基盤となってきた（「まえがき」）。こうした社会的動向については、障害をもつ人々の権利の保障が、形式にとどまらず本質においてなされているかどうかという点で問われていかねばならないが、上述のような分科会の理念は、生きている限り、すべての人々が発達の可能性を持つということが科学的に認識され、障害をもつ場合も含めた発達の理論が構築されていくことに向けて、歩を進めるものであるととらえることができよう。

さて、本書においては、8名の著者がそれぞれ1章を担当し、独自の経験や研究成果をふんだんに盛り込みながら「コミュニケーションという謎」にアプローチしている。

「コミュニケーション (communication) ということばは、共同の、共通の (common) という意味のラテン語からきて」いるという (やまだ氏、本書第1章)。では、コミュニケーションとは何だろうか。本書の著者の1人でもある菅原氏は、コミュニケーションという広い概念を定義しようとする試みを整理し、それぞれの特長や問題点を指摘している。彼の論考は、現状において「コミュニケーションとはなにか」という問いに単一の回答を要求することの困難さを示すとともに、定義を確定する前に、なおゆるやかな枠組みの中で検討されるべきコミュニケーションの姿があるのではないかということを示唆しているように思われる。

本書の著者たちも、たとえば、「コミュニケーション、人と人とが心を通じ合わせる、相手の気持ちを理解する」（「はしがき」）、「コミュニケーションとは、共通のものをつくりだす営みだといったらよいでしょうか」（やまだ氏、本書第1章）というように、枠組みをあえてゆるやかに設定することによって、世間一般にはコミュニケーションとみなされない（かもしれない）

ような現象にも光を当てようとしているところがある。本書が、「身体とことば」「リズムとことば」「文脈とこころの理解」という三部構成によって編まれていることは、特に、「今までコミュニケーションの問題は、喃語から言語への発達、語彙や文法の獲得など、言語そのものを中心に化されすぎて」（「はしがき」）きたことへの反論としてとらえることができるだろう。

本書の内容について、ここでは、各章のタイトルと著者名を記し、構成部ごとに短い総括を行っておく。

まず、「第Ⅰ部 身体とことば」は、「第1章 身のことばとしての指さし」（やまだようこ氏）、「第2章 まなざしを共有することと自閉症」（別府哲氏）、「第3章 重い遅れと通じ合う身体」（大井学氏）の3章から成る。第Ⅰ部では、話しことばを獲得していない乳児あるいは障害をもつ幼児の、ノンバーバルコミュニケーションの問題が取り上げられている。身振りを「言語よりも発達的に低次の行動と位置づけてはならず、それ自体の発達変化プロセスを「発達における喪失の意義」をも含めて検討すること（やまだ氏）、自閉症をコミュニケーション能力の障害というだけではなく「コミュニケーションのどのレベルに能力障害をもっているのか」を検討して、指導や援助の視点につなげていくこと（別府氏）、ことばか身振りと二者択一的にとらえるのではなく、両者の重なり注目して通じ合いのしくみを浮き彫りにしていくこと（大井氏）、等々、各氏の主張は、今後のノンバーバルコミュニケーション研究の方向性を示唆するものとなっている。

続く「第Ⅱ部 リズムとことば」は、「擬態語・擬音語とからだ」（遠矢浩一氏）、「反響と反復——長い時間のなかのコミュニケーション」（菅原和孝氏）の2章から成る。ここでは、言語学において長く主要な研究対象とされなかった擬音語や擬態語が、実は語用論的に重要な意味をもっていること（遠矢氏）、通常、自閉症児のコミュニケーション障害の特徴の1つとされる「おうむ返し」や「繰り返し」が、家庭内で自然なコミュニケーション手段となる場合があること（菅原氏）などがトピックとされている。「コミュニケーションの本質を情報の伝達とその解読にもとめる記号論のモデルに頼っている」（菅原氏）見失ってしまうような「通じ合い」の姿が存在するという指摘から、「コミュニケーションとはなにか」という問題を改めて考えさせられる。

最後の「第Ⅲ部 文脈とこころの理解」は、「会話が成立するときしないとき」（秦野悦子氏）、「“ふり”が通じ合うとき——ふり遊びの始まりと心の理解——」（木下孝司氏）、「関係が変わるとき」（鯨岡峻氏）の3章から成る。人と人とが会話する時、両者の発話意図はお互いにどのように理解されていくのか（秦野氏）、「ふり」遊びを行う1歳児は、他者の“ふり”に込められた意図をどのようにとらえているのか（木下氏）、障害をもつ子どもとの関係において何かが変わったと関わり手に思われるときには、何が変わり、誰に何が変わったと受けとめられているのか（鯨岡氏）。直接的に目で見たり耳で聞いたりすることはできない、場面の文脈や心の動き——そこの「通じ合い」があるという前提のもとでこそ、コミュニケーションの手段として言語を用

いる意義があるということが再認識される。

以上、本書の内容について大まかに記してきたが、最後に、本書の魅力として評者が感じたことを比喩的に述べておきたい。前述のように、本書では、「コミュニケーションとはなにか」という定義には拘泥せず、各著者が独自の立場から「コミュニケーションという謎」に積極的なアプローチを行っている。その様相は、さながら、8名の卓越したダンサーによって、舞台上で次々に「コミュニケーション」というテーマの創作舞踊が披露されていくかのようなのである。終演をむかえた時、観客の心には、コミュニケーションというものの新しいかたちが、イメージとしてたちのぼってくるのである。ぜひ、多くの人々に、この舞台へと足を運んでいただきたいと思う。

(日本学術振興会特別研究員)